龍谷
Ryukoku
2018 No.86

国際学部 嶋田 拓真 さん

龍谷 2018 No.86

Ryukoku Magazine 86 September 2018

CONTENTS

01 P01
Feature Article 巻頭特集 学長対談
自己を超えた
時間軸で考える
若松 英輔 さん × **入澤 崇** 学長

02 P06
Ryukoku 5長 News
・大学院「国際学研究科」を開設します
・大学院「農学研究科」の博士後期課程に、京都の有名料亭の主人三人が入学

03 P07
Ryukoku Event
・新校舎「東黌」完成記念シンポジウム
・龍谷大学大学院 実践真宗学研究科 創設10周年記念 国際シンポジウムを開催

04 P08
People, Unlimited
学内を超えて地域防災を学び
在学中に防災士資格を取得
尾崎 勇人 さん・**八木 賢志** さん 社会学部

P10
People, Unlimited
学生と学部をつなぐ橋渡し
めざすは「龍大一(いち)受けたい授業」
浜浦 秀弥 さん 政策学部

P12
People, Unlimited
デフサッカー日本代表
俊足を武器にワールドカップをめざす
堀井 聡太 さん 理工学部

05 P14
Education, Unlimited
水田を畑に転換し地域特産品の創出へ
食と農の未来へ
大門 弘幸 教授 農学部

P18
Education, Unlimited
学生と地元自治会の力で取り戻した
絆のあるコミュニティ
窪田 和美 教授 短期大学部

06 P22
Special Article 特別企画
人体のモデリングと
力学解析で命を守る
田原 大輔 准教授 理工学部

07 P26
World, Unlimited
よりよい観光の在り方を探って
祇園でアンケートを実施
デブナール・ミロシュ 講師 国際学部

08 P30
Event Ryukoku Museum
未公開作品を含む約 300 点
本館限定公開も
村松 加奈子 龍谷ミュージアム学芸員

09 P32
People, Unlimited 龍谷人
ヒット商品誕生のカギは
みんなを喜ばせたいという想い
阪上 かおる さん
株式会社セブン−イレブン・ジャパン

P34
People, Unlimited 龍谷人
既成概念を破る戦略で
ゴルフウェア世界トップをめざす
桑田 隆晴 さん
株式会社グリップインターナショナル 代表取締役社長

P36
People, Unlimited 龍谷人
旅行介護の会社を設立
福祉サービスをビジネスとして
大西 友子 さん 株式会社どこでも介護 代表取締役

10 P38
News & Topics
最新情報

11 P44
Book Café
新刊紹介

01 | Feature Article

巻頭特集 学長対談

自己を超えた時間軸で考える

批評家　東京工業大学教授
若松　英輔
×
龍谷大学学長
入澤　崇

若松英輔　わかまつ えいすけ　東京工業大学リベラルアーツ教育研究員教授。1968年新潟県生まれ。慶應義塾大学文学部仏文学科卒業。2007年「越知保夫とその時代　求道の文学」にて第14回三田文学新人賞評論部門当選。2016年『叡知の詩学―小林秀雄と井筒俊彦』（慶應義塾大学出版会）にて第2回西脇順三郎学術賞受賞。2018年『詩集 見えない涙』（亜紀書房）にて第33回詩歌文学館賞（詩部門）受賞。内村鑑三、石牟礼道子、神谷美恵子ら、後世へ受け継ぐべき先人の言葉を伝える評論や生きることを豊かにうたった詩集、エッセイ集など著書は20冊を超える。

生きることに真摯に向き合った著作が、混沌とした現代を生きる多くの人々の羅針盤となっている若松英輔さん。これからの時代を生きる、そのヒントを求めて、入澤学長が対談した。

未知なるものに出会う勇気

入澤　若松さんは内村鑑三に関する著作も書かれていますが、今の若い人が明治の偉人に触れられるようにしてくださったのを、私はとても嬉しく思っていました。というのも私自身も近年、明治初期の若い仏教者の言葉を掘り起こして胸を打たれたことから、あの時代を見直したいと考えていたのです。近年盛んにグローバル化と言われますが、明治の時代に世界に出ていった若者達って、自己表現などを超えた使命のようなものを持っていますよね。

若松　明治の頃は人類のために、あるいは内村は宇宙という言葉を使いますが、もっと大きな意味で何かを求めている人のところへ自分が学んだものを運ぼうという志をもつ人たちがいました。それが今の日本では、小さなところからなかなか出られず、自分が最後という感じが強いですね。若い人は「私は何をしたいのか」にこだわりますが、実際は人は自分の思う通りには生きられず、生かされるようにしか生きることができない。だから私たちは「どう生かされているか」を考えないと「どう生きる」かがわかってこないのではないかと思います。

入澤　若松さんは随想などで、若い人達が思索することをせず、すぐに判断したり選ぼうとすることにも警鐘を鳴らしておられますが、これは私も日々学生達と接していて強く感じることです。

若松　考えるとは10年、20年という長い時間のなかでおこなわれる営みであるということ。そういう長いタームのなかで人は生きている、ということを学んでほしいですね。宗教となると世紀を軽くまたいで考えます。そんな長い時空のなかで自分が何か働きをなすとはどういうことかと考えていくと、大切なことは自分が目立つことをするとか、自分らしく生きるといった自己表現ではなくなっていく。これからの大学生には、そういう時間軸を学んでほしいと思います。

入澤　今や大学へ入るとすぐに就職が一番の関心事になっていますが、大学とは就職のための予備校ではなく、自分の人生をじっくりと考える場所であるべき。大学はこのあたりをもう一度よく考えねばならないですね。

若松　20歳前後というのは人生が動き出すときですから、師と呼べる人と出会えるかどうかも大切ですね。学内にも在野にも師と仰げる人がいるというのは、とてもバランスが良いなと私は思っているんです。今の学生たちは、どうしても人から得なければならないものを、インターネットで得てしまうけど、それは山で見つけるべきものを海で探すようなものかも知れない。たとえ見つけても、それは似て非なるものです。似ているだけなのか本物なのか、そこを峻別できる目を学ばなくてはならない。食べもので考えてみるとよくわかりますが、似て非なるものを摂り続けた人というのは、とても危ういのではないでしょうか。

入澤 崇　いりさわ たかし　龍谷大学学長。1955年広島県因島生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。専門は仏教文化学。1990年文学部仏教学科に着任。ベゼクリク石窟壁画の復元事業や数多くの仏教遺跡調査に従事。2004年から5年間アフガニスタン仏教遺跡学術調査隊の隊長を務める。龍谷ミュージアム館長、文学部長を経て、2017年4月に学長就任。

相手の「いま」に深くかかわる言葉
それが教育の原点

入澤　もう一つ若松さんの本を拝読して、非常に心に残ったのが「我々の味わう悲しみに同じ悲しみはない」という言葉です。東日本大震災の際にも、「日本全体の大きな悲しみ」というようなことが言われましたが、被災した方々にあるのは、全部違った形の悲しみなのではないでしょうか。

若松　「大きな悲しみ」というやっかいな言葉があります。実はそんなものはなくて個々の悲しみだけがある。特に震災のような個人の意志を超越した出来事に遭遇したときは、意思の力だけではどうにもなりません。そうした時こそ大事なのは、「隣の人の手を握れるかどうか」ではないでしょうか。自分が危機の時に、同じく危機に直面している人の手を握ることができるか。それが人間の勝負だと思うのです。

入澤　隣の人に手を差し出すというのは仏教でいう慈悲です。私は慈悲を学生に教えるのに、鮮烈に伝える表現はないかと探して、「まごころ」という言葉にいきあたりました。これは非常に重い言葉なんです。最近は「まごころサービス」なんて、軽く使われていますけどね。ある辞書には「ひとに尽くすこと」と書いてあり、仏教でいう利他の精神です。「グローバル人材」なんていう言葉も、非常に安っぽい。これを「まごころを持った国際人」とすれば、世界のために尽くせる人間という、本来の意味が出てくるのではないでしょうか。

若松　人は言葉を見失うと実在を見失います。量的な「大きな」と「悲しみ」は、響きあわない、「まごころ」と「サービス」も同じです。本来なら結びつくはずのない言葉が誤って結びついて常識となっていく時代の方が私には暗く感じられます。現代の闇というのは真っ暗な部分ではなく、光のなかにいて光を探さない、暗くないからこれでいいんだという状態ではないでしょうか。自分のことだけ考えていれば暮らしていけて、このままが続けばいいと考えている人が多い。それこそが闇の中という気がします。

入澤　近頃、学生も多様化していて、それぞれ違った悲しみ、痛みを抱えています。教育者が彼らの抱えている闇に本気で向き合うためにはと、改めて見直したのが釈迦の対機説法です。釈迦は相手の資質や環境にあわせて話をしました。その教えの在り方こそが教育の原点ではないかと思うんです。

若松　対機はその相手の「いま」に深くかかわる言葉を話すということですね。宗教者は言葉を届けるということが何を意味しているのか、今一度考える時かもしれません。宗教者にしかできないのは、本当に人間の心の奥底に言葉を届けることです。若い宗教者には愛を語れる人ではなく、愛を運べる人になってほしいですね。愛を語る人はたくさんいるけれど。

入澤　そうですね。どんなに知識があっても、肝心の人間が見えていない。「宗教者の果たす役割は言葉を運ぶこと」。悲しみにくれる人が宗教者に期待することは何かを宗教界は改めて考えるべき。悲しみの形はすべて違う。マニュアルの通用しない世界に踏み込むのが宗教者です。現実直視が言葉を生み出すということですね。

02 | Ryukoku 5長 News

大学院「国際学研究科」を開設します

龍谷大学では、2019年4月に、新たに大学院「国際学研究科」を開設します。

本研究科は、2015年4月に開設した「国際学部」の学びに対応した修士課程3専攻(「国際文化学専攻」「グローバルスタディーズ専攻」「言語コミュニケーション専攻」)、博士後期課程2専攻(「国際文化学専攻」「グローバルスタディーズ専攻」)を設置します。

本研究科の修了生は、建学の精神に基き、グローバル化の加速的な進展のなかで、現在の国際社会が直面している諸課題・諸現象と批判的に向き合い、多様な文化が共生する社会の実現に向けて、国際的な舞台でリーダーシップを発揮することができる高度の専門的職業人・実務家・研究者としての活躍が期待されます。

【概　要】 名　　称：龍谷大学 大学院 国際学研究科
開設時期：2019年4月
学　　位：修士(国際文化学、グローバルスタディーズ、言語コミュニケーション)
博士(国際文化学、グローバルスタディーズ)
入学定員：修士課程:15人　博士後期課程:4人

大学院「農学研究科」の博士後期課程に、京都の有名料亭の主人三人が入学

2018年4月に開設した大学院「農学研究科」の博士後期課程に、京都の有名料亭の主人三人が入学しました。

・「一子相伝 なかむら」(中京区)六代目
　中村 元計 さん
・「京料理 木乃婦」(下京区)三代目
　髙橋 拓児 さん
・「京料理直心房さいき」(東山区)三代目
　才木 充 さん

料理人の勘や経験を科学的に見直し、和食の伝統に新たな風を吹き込むことを目的に入学。大学院で学んだ知識を社会に還元するため、三人の頭文字をとり、料理作家のフードラボ「KYOTO SNT LAB.」(http://snt.kyoto/)を結成。「和食文化と科学」に関する講演や料理講習会などの地域活性化の支援を開始しています。

料理人が研究者と連携、また「和食博士」として、研究者の視点を持つことで、研究熱が高まっているとのこと。さらなる美味しさの追求が期待されます。

03 | Ryukoku Event

新校舎「東黌」完成記念シンポジウム

「ことばのチカラ ～社会とつながる文学部の学び～」を開催

2018年2月、大宮キャンパスにおけるメインの教室棟として、新校舎「東黌」が竣工しました。

これを記念して、同年6月16日、「龍谷大学新校舎『東黌（とうこう）』完成記念シンポジウム ことばのチカラ～社会とつながる文学部の学び～」（共催：活字文化推進会議）を開催しました。

大宮キャンパスは、1887年（明治20年）、現在の「中央公論」の前身である「反省会雑誌」を、本学普通教校学生らが創刊した場所であり、様々な歴史やドラマを生み出してきた希有な場所でもあります。冒頭、これについて、入澤学長から説明があり、続いて、第一部では、直木賞作家で、「源氏物語」の現代語訳に取り組んでおられる角田光代氏と安藤徹文学部長（日本語日本文学科教授、専門は平安朝文学）によるトークセッション。第二部では、中央公論新社編集者 菅龍典氏、入澤崇学長（文学部仏教学科教授、専門は仏教文化学）も加わりパネルディスカッションをおこないました。

トークセッションでは、ことばで表現することや本を読むことの魅力、古典を読むことが現代にどのように活かせるのかといったことについて。また、パネルディスカッションでは、本シンポジウムのテーマをめぐって、それぞれのお立場から自由にご発言いただき、大学教育での文学部の役割、ことばのチカラの大切さについてお話いただきました。

龍谷大学大学院　実践真宗学研究科　創設10周年記念　国際シンポジウムを開催

2018年5月31日、大宮キャンパス 清和館にて、龍谷大学大学院実践真宗学研究科 創設10周年記念 国際シンポジウム「世界の苦悩に向き合う智慧と慈悲－仏教の実践的研究のための新視座」を開催しました。

米国のハーバード大学神学大学院で実践的仏教伝道者教育の試みをはじめられた二人の教授を招聘。龍谷大学大学院実践真宗学研究科における臨床宗教師研修プログラムの目的と実際を紹介し、お二人には国際的な視点から仏教の社会的実践の役割を語っていただきました。

04 | People, Unlimited

学内を超えて地域防災を学び 在学中に防災士資格を取得

尾崎　勇人　さん
社会学部 社会学科 3年生
兵庫県立伊丹高校 出身

八木　賢志　さん
社会学部 社会学科 3年生
兵庫県立鳴尾高校 出身

大阪北部地震、西日本での記録的豪雨、これまでにない連日続く災害級の猛暑…。2018年の夏は、防災に携わる者にも深く記憶に刻まれる年となった。本学社会学部で学ぶ、尾崎勇人さんと八木賢志さんの二人も例外ではなかった。

その社会学部で「社会共生実習」のプロジェクトの一環として、学生による救命講習等を活かした地域防災活動「The First Aid」(担当教員:栗田修司)が2017年度より開講された。そのなかで彼らは、学内および学外での消防防災にかかわる講習や実践活動を経て、今年3月、3年生の段階で防災士の資格を取得している。

地域防災を語る上で重要なキーワードが「自助・共助・公助」。特に自助と共助に関係する、地元に根付いた防災活動の取り組みとして、滋賀県湖南広域消防局や野洲市消防団などの協力を得て、消防防災の実習をおこなってきた。野洲第一、第二こどもの家に通う小学生とともに生活現場を歩いて防災マップを作る「ぼうさい探検隊」もその一つ。酷暑のなか、地震の揺れに弱いブロック塀や、大雨になると溢れる川の合流地点など、平穏時では見過ごしがちな危険ポイントを探しカメラで記録。その写真を大きな白地図に貼り、注意内容を記入、3日間かけ完成させた。

小学生達に防災マップ作りの指導をする尾崎さんと八木さん

これは机上の学習では得られない貴重なフィールドワークである。

「暑さで時間配分もうまくいかず予定していたルートの半分ほどしか回れませんでした。グループ10名に与えられた500円（総額）で、自分達が生き延びるために何が必要かを考えてコンビニで買うという課題もあり、小学生達が何を選ぶか興味がありましたが、なぜかイカの燻製でした」（尾崎さん）

「防災において重要なのは、世代を問わず誰とでもコミュニケーションができる能力です。これまでに幾度か避難訓練を体験したなかで実感したのですが、学生という身分だからこそフットワーク軽く、困っている人がいたら柔軟に動けることが結構あるんです。若いから体力もありますしね」（八木さん）

ちなみに八木さんの子どもの頃からの夢は消防士。卒業後、二人は社会や企業の防災リーダーとして活躍することだろう。

尾崎 勇人さん　八木 賢志さん

04 | People, Unlimited

学生と学部をつなぐ橋渡し めざすは「龍大一(いち)受けたい授業」

浜浦　秀弥　さん

政策学部４年生
履正社高校出身

「十学部合同学生会」ってご存じ?

四角張った名称からして歴史はあるようだ。さてこの組織、一体何をしているのか?

一言で言うと、「学生側と学部側の橋渡し役」。大学の正課(授業)環境向上のため日々活動している組織である。つまり、授業に対する学生側の意見を聞く機会を設けて、それを学部側に伝え、授業環境を向上させるのが主な取り組み。新入生には頭が痛い、授業の履修登録の相談に乗ったり、学生が意欲的に学びを深めるきっかけになるよう講演会を開いたり、活動は多岐にわたる。

各学部学生会は、秋におこなわれる学友会選挙を通じて選出された代議員を含む学部生全員で構成されている。この代議員の代表として執行委員長がおり、十学部合同学生会は各学部の執行委員長によって構成されている。そのなかで今年度の代表に選ばれたのが、政策学部に属する浜浦秀弥さんである。

「毎年4月におこなわれる履修相談会は、和顔館が完成して以降、少しずつ盛り上がりを見せ、認知度も上がってきました。自分自身、1年生の時に誰にも履修の相談ができず、失敗したことが頭に残っています。次世代のためにも、経験した問題点を改善したいとい

代議員のメンバーと打ち合わせする浜浦さん（中）。西岡祐紀さん・理工学部4年（左）、天野春香さん・経済学部4年（右）。

う一心で活動しています。結果は卒業後しかわからないですけどね。立候補したのは選挙を通じて自分を変えてみたいと思ったから。こうした活動のなかでリーダーを任され、人前で発言する機会も自然と増えたことが就職活動にも役立ち、不動産業界で内定をいただくことができました」と語る浜浦さん。

十学部合同学生会では、「学生FDサロン」という学生と教員がともに参加する勉強会もおこなっている。テーマは、「理想の授業の受け方」について。「龍大一受けたい授業」とキャッチコピーをつけたのも浜浦さん。大学正課環境改善のために活動する十学部合同学生会。その存在自体知らない学生もまだまだ多い。また、今年からは教学企画部の協力も得て、各学部長に直接意見を言う機会も設けられた。10月にも「学生FDサロン」の開催を予定しており、活動は盛んだ。

※イベントの最新情報は、twitter（@kengakunoseisin）で

浜浦 秀弥 さん

04 | People, Unlimited

デフサッカー日本代表 俊足を武器に ワールドカップをめざす

堀井　聡太　さん

理工学部２年生
東山高校出身

デフサッカーとは聴覚障がい者によるサッカーである。普通のサッカーとの違いは、プレーヤーは音が聞こえないのでレフェリーが旗を使うところだ。そのデフサッカー日本代表で、レギュラー最年少選手が堀井聡太さんだ。堀井さんは、50m6秒という俊足を活かして、守備とともに攻撃のカギとなるサイドバックを担う。今年開催されたアジア選手権にも出場し、銀メダルを獲得した。

堀井さんが「感音性難聴」と診断されたのは、物心つく前の2歳の頃。現在は、補聴器をつけてわずかに聞こえる聴力と読唇術で日常を過ごす。サッカーを始めたきっかけは、テレビで観たイングランドのプレミアリーグだ。小学2年生の時、フットサルからスタートしたが、サッカーへの憧れが捨てきれなかった。父親に「障がいがあってもできないことはない。後悔しないように」と背中を押され、5年生からは地元のサッカークラブチームに所属した。

「あの言葉には支えられました」と語る通り、これまでの道のりは決して順調なものではなかった。「一番つらかったのは高校生の頃。プレー中に、“補聴器をつけているんだから聞こえるんだろう”と、文句を言われ、サッカーをやめようとも思っていました。大学に入ってからは、自分も説明不足だったと思い直し、

2021年のデフリンピック出場をめざし練習する堀井聡太さん

積極的に障がいについてチームメイトに話しました。そのおかげか今は仲間に恵まれています。僕はドリブルが得意で自分で切り拓くタイプ。聞こえない僕の自由な動きにあわせて、みんながカバーしてくれているのがわかります」

一方、デフサッカーは手話でのやりとりが普通。「手話も、大学に入ってから一年で覚えました」という熱心さを持つ。そんな堀井さんの毎日は目まぐるしい。大学サッカー部での練習、デフサッカー代表の練習、授業…。そのうえ二つのバイトを掛け持ちし、部費・補聴器・バイク代などを家族に頼らず、自ら賄う。

「ダラダラしている時間はないですね。切り替えが大切。誰よりもキレイ好き。学内の掃除のアルバイトもしています。ご飯の盛り付けにだって、こだわります。夢ですか？プロのサッカー選手という夢はありますよ」と、はにかむ笑顔は20歳のシャイな青年そのものだ。

堀井 聡太 さん

05 | Education, Unlimited

水田を畑に転換し
地域特産品の創出へ
食と農の未来へ

農学部 資源生物科学科
大門 弘幸 教授

農学部生がつくったピーナッツ菓子

2018年6月6日。水田転換畑で農学部生が育てた落花生でつくったピーナッツ菓子「龍谷の実」が発売された。ただの落花生ではない。千葉県産「おおまさり」という、通常の2倍ほどもある超大粒品種だ。それを特殊技術でキャラメリゼした産学連携の新商品は、発売から1カ月足らずで完売した。龍谷大学農学部から発信する新たな水田農業の方向性、その提案の一つの結実と言える。

今回の取り組みは、「食の循環実習」の一環として、農学部一期生が入学年度から全員で進めてきたものだ。背景には国内農業が直面する課題がある。約50年間にわたって続いたコメの減反政策が、2018年度産から廃止になった。米消費量も減少するなか、日本の農耕地の約半分を占める「水田」をリソースとしてどう活用するか、新たな戦略と技術が待たれている。

水田転換畑で畑作物を高品質かつ安定的に生産するには、解決を要する課題がある。一つは排水性の向上だ。水田土壌のままでは酸素が少なく、根がつまってしまうのだ。農学部のある滋賀県は農耕地のじつに95%が水田だ。この地域の粘土質の土壌でどんな可能性を拓くことができるのかは、重要な意味をもつチャレンジでもあった。一方、畑にすることで酸化状態になるため、次第に地力が減耗して収量が落ちてしまうことも課題となる。

「そこに科学のメスを入れなければなりません。数値化とサイエンス。そうした知見と技術をもった若者が現場に入っていくことが必要です。農学部の使命の一つです」

この取り組みを牽引し、学生を指導する大門弘幸教授は、長年マメ科植物と根粒菌の共生を研究する緑肥の専門家でもある。

「農学研究は地域研究。地域や風土を意識することが大切」と大門教授。

「農学」で農業を持続可能にする

緑肥とは、まだ青い生の草や葉を土中にすき込んで肥料にすること。とくに窒素やリンを多く含むマメ科の植物は緑肥に適し、よく用いられてきた。そこで窒素肥料となる落花生を栽培し、秋作のパン用小麦との輪作とした。パン用国産小麦は生産量が少なく需要は多い。地力補完に加え、利用率を上げて農耕地を有効活用するのが狙いだ。

「落花生の収穫後、その茎葉部を緑肥として畑にすき込み、小麦を播きます。昨年度は落花生の品種による窒素含量・収量の違いを調べました」。大門研究室で学ぶ4年生の道山祐子さんは、緑肥をテーマに卒業論文を執筆。卒業後は土壌診断や生育アドバイスなどもおこなう農業機械メーカーへの就職が内定している。

落花生は千葉など水はけのよい土地でつくられる作物で、水田転換畑での落花生栽培には先行研究がほとんどない。「先行研究がないからこそ、生育条件、収量、品質等の基礎データの蓄積が重要です」と大門教授。「緑肥も昔から続く農法ですが、効果がきちんと数値化されておらず、科学的な再評価が必要」とデータの重要性を強調する。

同研究室4年生の山下博士さんは、奈良の実家が農業を営む。「今は水田ですが、転

瀬田キャンパス実習用牧農場。実際の生産現場に近い条件下で試験栽培ができる。

山下 博士さん（4年生）　道山 祐子さん（4年生）

大門 弘幸・だいもん ひろゆき

1956年東京都生まれ。大阪府立大学大学院農学研究科園芸農学専攻博士後期課程単位取得。大阪府立大学を経て2015年4月より現職。環境調和型作物生産技術の開発、化石エネルギー投入量の少ない持続的な作物生産体系の確立をめざし、マメ科作物などを肥料とする緑肥や、穀類とマメ類の混作・輪作などを研究。2005年 第51回日本作物学会賞受賞。著書に『作物学概論（編著、朝倉書店、2018年）、飼料・緑肥作物の栽培と利用（編著、朝倉書店、2018年）』など。

換畑にできれば」。当事者意識も持ちつつ、研究を深めるべく、2018年に開設した大学院農学研究科に進学する。「『龍谷の実』は、種まきに始まり、栽培や収穫にもずっと関わってきたので、実際に商品化されて感動です」。地域特産品創出のプロジェクトは、農業の6次産業化や地方創生の観点からも注目される。

地域経済、持続可能な開発目標（SDGs）、社会的要請など、農業を取り巻く環境変化はめまぐるしい。種子法や遺伝子組み換え食品の是非をめぐる議論など、「食と農」への関心が多角的に高まるなか、知識と戦略、技術と倫理を兼ね備えた人材が切望されている。2019年春、一期生が農学部を巣立つ。

05 | Education, Unlimited

学生と地元自治会の力で取り戻した絆のあるコミュニティ

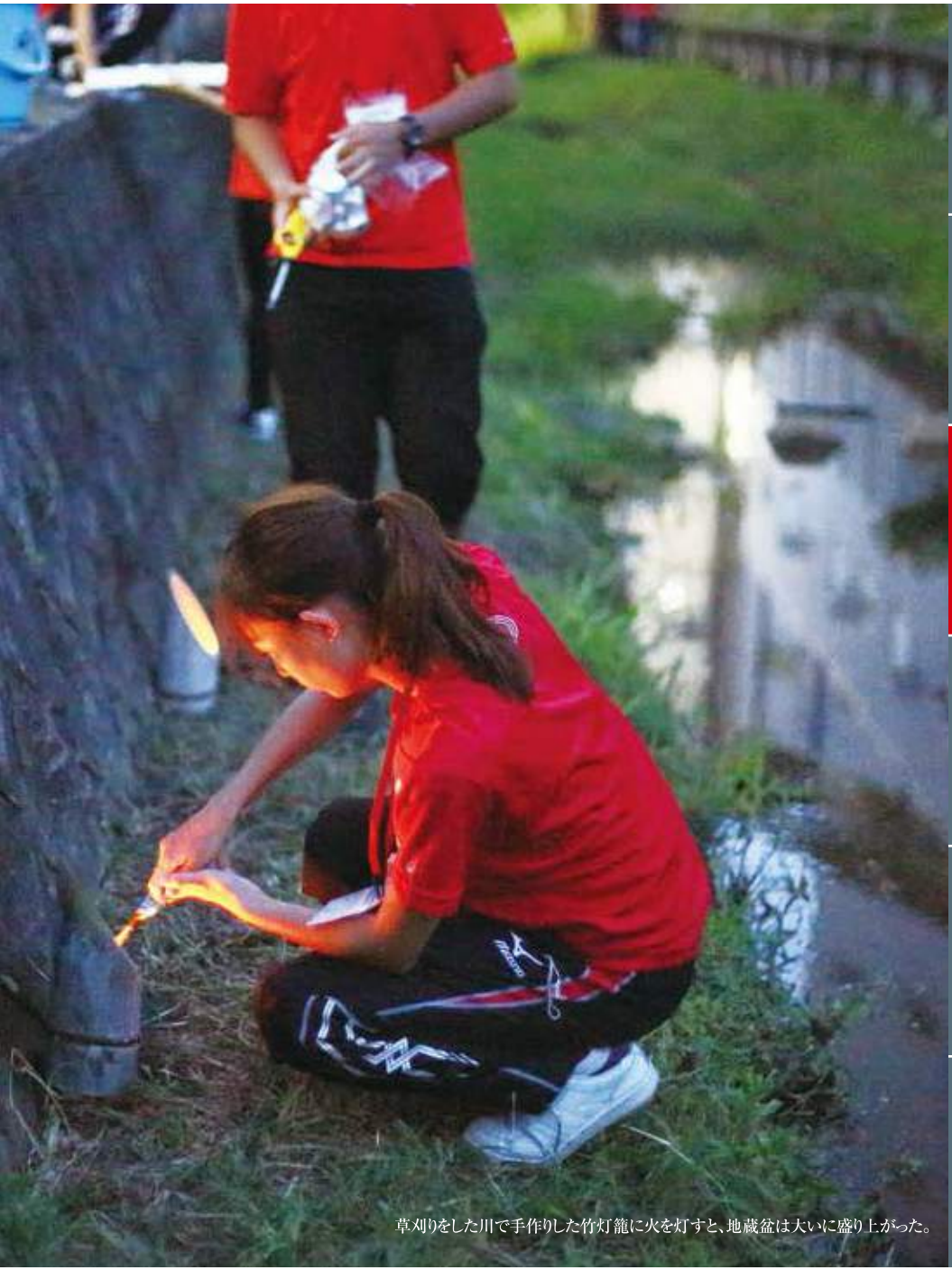
短期大学部 社会福祉学科
窪田 和美 教授

異なる世代の人達と触れあうことが重要

地震や大雨が続き、災害への備えが叫ばれる昨今、再び見直したいのが、災害時にこそ大きな役割を果たすといわれる地域コミュニティの在り方だ。地域の一員として大学がどのような役割を担えるかが模索されるなか、一つのモデルケースとなる活動をおこなっているのが、本学短期大学部社会福祉学科窪田和美ゼミの学生たちだ。

窪田ゼミでは4年前から毎年、深草キャンパスにほど近い川久保町の地蔵盆の企画・運営や、町内を流れる東高瀬川の清掃を通じて地域の活性化に貢献してきた。この活動は、大学と地域が連携して地域の活性化をめざす取り組みを支援する「学まちコラボ事業」(京都市と公益財団法人大学コンソーシアム京都が実施)に採択され、昨年度は認定された27事業のなかから優秀賞を受賞している。きっかけは、5年前に川久保町が地蔵盆に学生ボランティアを募集したことだった。興味を持った窪田ゼミの学生が参加したところ、子ども達は大喜び。この町内では自治会役員と子ども達との世代間格差が課題だったが、大学生が橋渡し役となり地蔵盆は大いに盛り上がった。後日届いた子ども達からの手紙には、楽しかったという感謝の言葉とともに来年も来てほしいという願いが書かれていた。そこに着目して、この活動を地域実習(まちづくり)の授業にしてみようと思いついたのが窪田教授だ。

「私のゼミには地域活動に興味をもち、政策学部などへの編入学を考えている学生がいます。そんな学生の成長のためにも世代の異なる大人や子どもと触れあい、実社会と関わる経験は重要だと考えました。参加した学生は、自分達の活動がこんなに喜んでもらえるなんて、という驚きと喜びを実感しています。



草刈りをした川で手作りした竹灯籠に火を灯すと、地蔵盆は大いに盛り上がった。

また、現時点での学びはもちろん、将来的には、学生達が家族を持った時、この活動を思い出し、地域活動に参加するでしょう。そのことがきっと、コミュニティの大きな力になると期待しています」

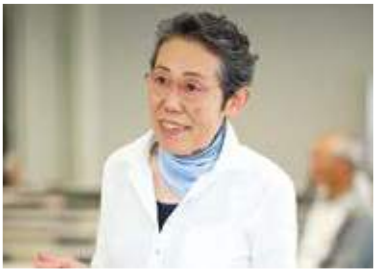
学びの場はすぐ隣にある

学生達が川久保町の地蔵盆に参加するにあたって直面したのが、会場となる東高瀬川のゴミの不法投棄問題だった。空き缶やペットボトルが投げ捨てられ、草はのび放題。人々を寄せつけない場所になっていたので、伝統行事の前に河川清掃と草刈りを実施した。さらに、近隣の京都工学院高等学校（旧伏見工業高等学校）の生徒たちと地域役員及び学生たちが100個の竹灯籠を手作りし、地蔵盆当日に河川を幻想的に彩った。

川を集いの場所と再定義したことで、不法投棄は減少し、自主的にゴミ拾いをする住人も出てきたという。それに伴って、地蔵盆の参加者も年々増加している。地域の人々からは「おかげで顔をあわせたら挨拶できる人間関係ができた」、「地蔵盆が地域のつながりをつくっている」、「これまで顔を見たことがない人も出てきてくれるようになった」と、喜びの声が上がっている。

今年も学生たちは、どうしたら地蔵盆を楽

地元自治会の役員を交え、地蔵盆の企画を考える学生たちと窪田教授。



窪田 和美・くぼた かずみ
龍谷大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了、文学修士。2008年より龍谷大学短期大学部社会福祉学科教授。専門は社会学、地域社会学、宗教倫理をテーマに「近江商人の生活態度」を研究。宇治市環境保全審議会委員、京都市バリアフリー移動等円滑化基本構想連絡会議委員。学まちコラボ事業として、伏見深草・東高瀬川の環境保護と地蔵盆プロジェクト（2015年7月～継続中）を実施。学生が地域の伝統行事に参加することを通じて、地域社会の活性化を図る活動に精力的に取り組んでいる。共著に『近江商人の酒造経営と北関東の地域社会』（2016年岩田書院）がある。

しんでもらえるか工夫を凝らすとともに、前年の活動をうまく継承するために、ゼミメンバーはSNSを通じて資料を共有するなど、経緯が残るよう工夫している。

災害時、地域の人同士の助け合いは非常に大きな力になる。このような活動がベースとなって地域に絆ができることで、日々の暮らしをより豊かで安心なものにすることができるはずだ。川久保町でも、自治会内での交流が深まり、防災マップ作りや防災活動、安全確認の情報収集などの計画が進行していると聞いている。「すぐそばに大学の力を必要としているところがある。これを学びに活用しない手はない。学びの場はすぐ隣にあるのです」

06 | Special Article

特別企画

人体のモデリングと力学解析で命を守る

理工学部
機械システム工学科
田原　大輔　准教授

田原 大輔　たわら だいすけ　1978年富山県生まれ。金沢大学工学部人間・機械工学科卒業。三菱スペース・ソフトウエア（株）を経て、2006年金沢大学大学院自然科学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。2006年より京都大学にて科学技術振興機構研究員、理化学研究所研究員。2009年より本学理工学部助教、講師を経て2017年より准教授。2018年4月からデンマークのオールボー大学に1年間の予定で国外研究員として滞在中。

医療を支える生体力学

「医師自身が救えるのは目の前の患者に限られるが、工学で優れた技術を作ると、たくさんの人を助けることができる。そこが醍醐味」と話すのは、本学理工学部の田原大輔准教授。

工学というと、自動車、航空、ロボットなどのイメージが強いが、実際はもっと幅広い。医学が発達したとよく語られるが、実際に発達しているのは医工学のほうで、機械工学や電気工学などがかなり寄与しているのだ。とくに機械工学のなかでも「生体力学」という、日本ではまだ40〜50年の比較的新しい分野の発展が関係している。

「機械工学自体は100年以上の歴史があり、100年前の教科書から基礎的な枠組みは変化をしていません。そこから新しい研究をしようと思うと、非常に微細なレベルの取り組みになってくる。でも生体力学は歴史が浅い。その分野で明日の教科書の1ページを作りたいと思っています」

文部科学大臣表彰の若手科学者賞を受賞

田原准教授が学生時代から15年以上取り組んできた、「骨質を反映した骨と歯の力学解析手法の開発とその応用研究」。今回、この研究が評価され、平成30年度「科学技術分野の文部科学大臣表彰」の若手科学者賞を受賞した。これは科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた40歳未満の若手研究者に贈られるものだ。

業績は大きく三つ。一つは、それまで骨密度だけで測られていた骨折リスクに対して、機械工学の技術をもとに、新たな評価視点を提案したこと。骨のX線CT画像をつなげて、その人の骨の形と材料特性の両方を計算機上にそっくりそのまま起こし、計算機内で力をかけるシミュレーションをすることで、どこで、どんな力で折れやすいか、どこまで耐え得るかなどを予測できるようにした。この力学解析を使うことによって、骨密度だけで医師が「薬の効果がない」と判断するケースも、力学的に見ると確実に強くなっていることがわかる場合がある。このように、これまでよりも詳細な評価・分析が可能になった。

二つ目は、代謝による骨再構築のシミュレーション。骨の内部は、代謝によって、骨が受ける力に理にかなった形へと時々刻々と変化している。だいたい3カ月に1回、骨が生まれ変わるのだという。健常であれば骨の形成と吸収のバランスが取れているが、骨粗鬆症の人は、吸収が圧倒的に強いので骨がスカスカになっていく。骨がどのように痩せていき、その過程で力が集中するこの箇所が折れやすい、といったことがシミュレーションでわかるようになった。

三つ目は、歯の手術のシミュレーターの開発。インプラントなど高いスキルが必要な手術の増加により、医療事故の事例も多くなってきている。そこで、歯科医や歯科学生向けに、リアルな手術の感覚を体験してもらえるように、手術シミュレーターを作った。実際に削らなくても、手元でリアルな振動の具合を体験することができる。いかに本物っぽい感触を与えられるかがポイント。CT画像を用いて計算機上で歯を再現して解析し、ドリルにかかる力を求め、それをシミュレーターに搭載した。あえて手術の失敗事例も体験できる。

これらの技術は現在、整形外科や歯科の現場で、普及や理論教育のフェーズに入ってきている。

橋梁建設現場を見て芽生えた力学への興味
祖母の転倒骨折で使命感へ

「私が小学生の頃、新潟と富山の県境に建設中だった海の上を走る北陸自動車道。支柱は風や波、重さにさらされているけど、なぜ壊れないんだろうと気になって落書帳に工事中の橋の絵をいっぱい描いていました。力学的に見事に計算されつくした立体交差の美しさに大興奮でした。学部生になった時、骨をテーマにしている先生との出会いがきっかけで、骨の研究を始めました。橋は各部分のパーツが組み合わさって、車や人を通すという機能を発揮しています。骨も似ていて、小さな細胞が小さな骨を形作り、それらが組み合わさって全体で一つの力学的な機能を発揮します。そこに同じ魅力を感じました。

高齢で骨折して入院すると死亡率があがるとよく言われますが、私の祖母が亡くなったのも転倒骨折・入院が引き金でした。それを目の当たりにした時、技術はこういうところに使うべきだと強く感じました。だからこそ、生体力学で骨折リスクを予測できることは大きな意義があるのです。女性ホルモンの分泌がなくなると骨を吸収する細胞が野放しになって、骨粗鬆症になるリスクが高くなります。女性のほうが長寿命化している分、危ない時期が長くなります。女性を救うという意味でも大事な技術だと思っています」

今後の研究開発について語る田原准教授

全身の力学的機能のモデリングをめざして

現在、田原准教授は1年間の予定で渡欧している。筋力のシミュレーションに強いデンマークのラボでさらに研究を広げるためだ。

「骨のシミュレーションの計算機上での力のかけ方は20年間変わっていなくて、今だにエイヤで与えてるんですよ。だいたいこんな力がかかるだろうと。でも実際はその人の筋力などでも変わってくる。そこも一緒に考えられると、骨折リスク予測も、もっとリアルになると思っています。全身の動きをモーションキャプチャに取り、筋力を予測することに取り組んでいるラボで修業して、筋力を骨のシミュレーションに反映させることをめざしています。そうすれば、骨の病気で歩行のバランスが崩れている人の手術支援や、インプラント・アシストデバイス設計などにも応用できる。必要のない部分までサポートしてしまっている現状の一般的なデバイスよりも、さらに狙った筋肉だけをサポートできるように進化できるはずです。

最終的には全身の機能のシミュレーションの必要性が出てきますが、それは50年、100年先でも難しいかもしれません。でも今できる骨、筋力と代表的な部位から一つずつモデリングを進めていくことが、未来の技術につながっていくと考えています」

07 | World, Unlimited

よりよい観光の在り方を探って祇園でアンケートを実施

国際学部　国際文化学科
デブナール・ミロシュ　講 師

情緒ある街並みが続く祇園花見小路界隈、背景には舞妓さんの姿も。

観光客の急増で、風情が失われる花街

京都市を訪れる観光客数はピークの15年から減少したものの、宿泊者数および観光消費額は過去最大を更新し続けている。観光産業という点では大変な朗報なのだが、とくに増加し続けてきた外国人観光客による交通の混乱や住人とのトラブルが相次いだり、街並みが一変してしまうなど、弊害は深刻な問題となっている。そんな実態を学生主体で調査しようというのが、国際学部のデブナール・ミロシュ講師による授業『実践プログラム2〜国際観光と京都』だ。

調査対象となるのは、京都随一の花街・祇園の花見小路界隈。花見小路の四条通から南側、建仁寺に至るこのエリアは、格式ある店が軒を連ね、従来は「一見さんお断り」で、限られた常連客や予約客しか足を踏み入れない、ひっそりとした地区だった。しかし近年は、朝から晩まで通りが埋まるほどの外国人観光客で賑わい、風景は一変。店舗や住居の写真を撮ったり、場合によって侵入しようとする人までいて、日常生活にも支障が出てきている。そんな観光客となんとか折り合いをつけられないかと、解決策を模索していた祇園南側地区協議会がデブナール講師に調査を依頼したのがこの授業の始まりだ。

デブナール講師は、スロバキアから日本へ来た大学院生の頃からこのエリアに関心を持ち、協議会がおこなう毎月の会議にも参加してきた。今回の要請を受け、国際学部の学生にとっても観光は関心の高いテーマであることから、授業への採用を決めたという。

「学生には地域社会への理解促進や、調査スキルの取得を期待していますが、外国人に声をかけ会話するという経験そのものにも意味があり、語学やコミュニケーションの鍛錬になると考えています」

目標は300件のアンケート回収

学生たちは4回の事前授業で、協議会の理事から地域の概要や悩みの実態などを聞いたり、地域政策の専門家の講義を受けるなどして、予備知識を身につけてから調査に臨んだ。期間は8月7日から12日までの約1週間で、祇園・花見小路の街頭で実施。

アンケートはタブレットに入力してもらう形で韓国語、中国語、英語版を用意し、質問は、祇園に来る理由、飲食に使う予算、ガイドの有無、参考にした情報源など約20項目だ。そのほかにも学生は一人ひとり研究テーマを持ち、アンケートと同時にインタビューをおこなう。目標回収数は300件である。

8月10日は夕方4時からのスタート。立っているだけで汗が滲んでくるような暑さのなか、街頭で調査活動に励む学生たちを訪ねた。通訳サポートの留学生1名を加えた3、4名1グループの計5チームが花見小路を歩く外国人に積極的に声をかけていく。この日は2日目だったので、だいぶ慣れてきたという嶋田拓真さんは、「欧米の観光客はジェスチャーを交えて話すなどコミュニケーションがとても上手で、勉強になりました。『芸者さんはどこで会えるの？』など逆に質問されることも多く、会話の練習にも役だっています」と話してくれた。一方、これまでほとんど祇

積極的にアンケートを呼びかける学生達。

園に来ることがなかったという星尾佳奈さんは、「観光客に追いかけられて困っている舞妓さんの姿や、価値観の違う外国人を目にして、この地域の方々が本当に困っていることが理解できました。地域と観光客が共存する難しさも感じましたが、今回の調査結果を活かして適切な解決策を示したいと考えています」と意欲的だ。

戸惑いながらも懸命にコミュニケーションを試みる学生達は、ノルマをこなすだけでなく、外国人と会話をする楽しさや意思疎通できたことによる自信を感じ、より良い刺激を得たようだ。

アンケート結果は今後報告書としてまとめて印刷するほか、地域住民へ向けたプレゼンテーションもおこなう。地域住民だけでなく観光客自身からも「混雑しすぎていて楽しめない」といった不満が上がりはじめている今、対策は急務だ。よりよい観光の在り方へ向けて、学生たちの画期的な解決策のアイデアを期待したい。

デブナール・ミロシュ講師

08 | Event Ryukoku Museum

未公開作品を含む約 300 点 本館限定公開も

2018 9.22(土)▶11.25(日)

休館日 = 月曜日(祝日の場合は翌日)

主催 : 龍谷大学 龍谷ミュージアム、産経新聞社、京都新聞
特別協力 : 浄土真宗本願寺派、本山 本願寺

日本漫画界の鬼才・水木しげる氏(1922〜2015)。鳥取県境港ですごした幼少期に見た正福寺の「地獄極楽絵図」に心を奪われ、以来、不思議な世界に魅入られていく。太平洋戦争中には激戦地ラバウルで片腕を失い、生と死の境をさまよう壮絶な体験を経て、遅咲きのメジャーデビューを果たす。極貧生活のなかでも、押しも押されぬ人気作家となってからも、独自の画風を模索しつづける。そして、失われた命への慰めとこの世に生きる人々へのメッセージともいえる作品を全身全霊で描き、93年にわたる生涯を現役でありつづけた。

秋季特別展『水木しげる 魂の漫画展』では、水木氏の画業を8章にわけて展覧する。展示作品は、生原稿・原画、少年期に描いた貴重なスケッチから、愛用の道具、本人所蔵コレクション品、映像作品まで、未公開作品を含む約300点。また、仏教総合ミュージアムである特性をふまえ、本展(京都会場)独自の企画として、水木氏の宗教文化への深い造詣がうかがえる4作を龍谷ミュージアム限定で展示する(展示替えあり)。

「水木作品は学術的な性格が強く、仏教はもちろん、神道、道教、土着の信仰まで、各国各地に根ざした多様な宗教文化に対する深い見識が作品のバックボーンにあります。たとえば今回当館で限定展示となる『決死の渡海 補陀落浄土』は東大寺戒壇院の千手観音像の厨子に描かれた補陀落山図がモチーフですし、『八大地獄の光景』は江戸後期に流通した版本が典拠です。過去の作品、歴史、民俗学を精力的に学び、作画活動に反映させていることを感じていただければと思います」

会期中、京極夏彦氏、宮崎哲弥氏、小松和彦氏による記念講演会やワークショップ、学芸員によるスペシャルトークなども開催。「ゲゲゲの鬼太郎」に代表される妖怪漫画のほか、短編や戦記物、人物評など、対象への深い探求心・洞察力が生み出した多彩な水木ワールドを堪能でき、子どもからお年寄りまで幅広く楽しめる内容となっている。

村松加奈子 龍谷ミュージアム学芸員
http://museum.ryukoku.ac.jp/

『妖怪たちの棲む森』1979年 ©水木プロダクション

09 | People, Unlimited

龍谷人

ヒット商品誕生のカギは みんなを喜ばせたいという想い

株式会社セブン―イレブン・ジャパン
商品本部　FF 惣菜部
FF・冷凍食品マーチャンダイザー
阪上　かおる さん

「ホームランはなかなか打てません。ヒットを重ねてナンボですね」というのは、野球ではなく商品開発の話。全国に約2万400店を展開するコンビニ最大手、セブン―イレブンに並ぶ商品のなかで、冷凍食品の商品開発を担当しているのが阪上かおるさんだ。

阪上さんが開発を担当する冷凍食品の商品数は100種類以上にのぼる。ホームラン、つまり大ヒットになれば全国で話題になり、大きなやりがいが得られる一方、ヒットの裏には生みの苦しみがある。市場調査や試作を重ね、製造やコストの難題を解決するなど多くのハードルを超えねばならない。消費者の嗜好が多様化する昨今、人気商品を生み出すのは至難の業だ。

大学時代には、マーケティングや財務諸表の分析を学び、就職してその学びがリアルな市場で通用することに感激したという阪上さん。しかし、いくら詳細なデータを集めても、それだけではヒットには結びつかないという。

「マーケティング・データと消費者感覚のどちらからも適正な距離を保つことを大切にしています。ロジカルな戦略と、売り場での直感の潜在的なニーズを掘り起こすことがヒットにつながるような気がしますね」

趣味は買い物と人間観察。スーパーで買い物客のカゴの中をこっそり見ては、その人の生活を想像する。なぜ売れるのか、購買のポイントはどこか。考えだせば止まらない。モノが選ばれ、売れる理由に興味が尽きない。そんな彼女にとって、この仕事は天職だろう。

「お客様が本当に欲しているものを作り出して、喜ばせたい。それだけでなく、加盟店オーナー様やともにチームを組むメーカー様、関わる人みんなにプラスになるものづくりをすることに、やりがいを感じています」

商品開発にはセンスや経験が必要だ。しかし阪上さんの打率が高いのはそれだけでなく、“人々を喜ばせたい”という純粋な想いが根底にあるから。ヒットの神様は、どうやら利他の心を持つ者に微笑むらしい。

さかがみ かおる　大阪府泉南郡出身。2006年経営学部卒。株式会社セブン－イレブン・ジャパン入社。同社ではチームMD（マーチャンダイジング）といって、原料メーカーや製造メーカーなど様々な分野のプロとチームを組んで商品を作るが、阪上さんはその中心となり、味など内容の企画はもちろん、製造方法、価格の決定など商品が世に出るまでの全てに関わっている。

09 | People, Unlimited

龍谷人

既成概念を破る戦略で ゴルフウェア世界トップをめざす

株式会社グリップインターナショナル
代表取締役社長
桑田　隆晴　さん

アパレル業界不況といわれるなか、スポーツマインド向上で活況を呈しているのがゴルフウェア市場だ。牽引するのは女性ゴルファー。自分磨きや趣味としてゴルフをする女性達は、もちろんウェアにもこだわる。そんな女性ゴルファーやトレンド指向のゴルファーが熱く支持する、「Heal Creek」「VIVA HEART」といった、ハイセンスなブランドを展開しているのが、グリップインターナショナルの桑田隆晴社長である。

桑田さんは2001年に起業し、大手アパレルしか手掛けていなかったゴルフウェアに参入。ベンチャーならではの斬新な発想と機動力で、瞬く間にトップブランドへ駆け上がった。

「商品中心の思考になりがちなアパレルのなかで、私はマーケットをつくることを第一に考えました。ファッショナブルなゴルフウェアを求めている人達は絶対にいる、という仮説から事業を構想し、ロゴや広告などクリエイティブには一流のデザイナーを起用。店舗もスポーツショップではなく、ファッションブランドのように洗練されたものにしました。一方、PRは経済誌を中心に取材してもらうことで、ビジネスパーソンへのブランド認知向上を狙いました」

折しも海外投資会社のゴルフ市場参入や、タレントとしても活躍する女子プロゴルファーの増加など、ゴルフを取り巻く環境が大きく変わり出した時だった。追い風を受けて、創業時は1億円に満たなかった売り上げが10年目には20億、現在は30億を超える。成功の秘訣を「私はゴルフウェアに特化し、少々極端なシナリオを描き、注目されることでたくさんのチャンスを得ました。スペシャリストの方が注目されやすいのでゼネラリストより成功しやすい。ただまだ成功とは言えずその過程です」

今春には韓国企業と提携し、韓国内に30店舗を開店。アジアのほか、欧州へも進出予定だ。

「いま必要なのは人財。ぜひ龍大生に来てほしい」。ゴルフウェアで世界一、という熱い夢を追ってみたい方は、ぜひ応募されたし。

くわた たかはる　大阪市出身、1981 年経済学部卒。株式会社ワールドを経て 2001 年5月に神戸三宮にゴルフウェアの企画販売を手掛ける株式会社グリップインターナショナルを設立。関西 1 号店をうめだ阪急に、関東1 号店を伊勢丹新宿本店にオープン。現在、主要都市の百貨店、ゴルフ専門店、路面店マーケットごとに8ブランドを展開する。

09 | People, Unlimited

龍谷人

旅行介護の会社を設立 福祉サービスをビジネスとして

株式会社どこでも介護　代表取締役
大西　友子　さん

「『介護旅行はビジネスにならない』とよく言われます。ほかに主軸事業をもつ企業がやることがほとんど。でも私は介護旅行がやりたかったんです。それもビジネスとして」

卒業後、20年以上介護や医療の現場で活躍してきた大西さん。脳梗塞の父親の介護経験を通じて、本当は出かけたいのに出かけられずにいる人の存在に気づいた。日常生活をサポートする福祉制度はあっても、旅行や行楽に対応できるサービスやシステムはほとんどない。けれど、旅というひとときの非日常が、どれほど心を豊かにし、普段の日常をも輝かせてくれることか。めざすのは体が不自由であっても、いくつになっても、行きたいところに出かけられる社会。

介護タクシーを使った旅行はもちろん、お墓参りや冠婚葬祭から、ショッピング、外食、映画、スポーツ観戦まで、ニーズは多彩だ。毎年、甲子園球場に阪神タイガースの応援観戦に行かれる車椅子の常連さんもいる。

最初はボランティアから始め、NPO法人を経て、2013年に株式会社を設立。龍谷大学瀬田キャンパスの、龍谷エクステンションセンター（REC）レンタルラボに入居した。

「社会学部の先生と産学連携の取り組みを模索したり、産学連携コーディネーターなど、センター職員の方に、助成金申請など制度利用の相談にのっていただいたりと、日々お世話になってます」

何かに困ったとき、相談する先がある安心感は大きい。「福祉サービスをビジネスとして成立させたい。大手にできないきめの細かいサービスを実現して強みにしていければ」。市場開拓・サービス圏の拡大も視野に入れつつ、「旅を介した地域コミュニティーを育てたい」と、地域の顧客どうしが出会う機会づくりにも力を入れる。思い描くのは、人どうしがともに生きる社会だ。「大切なのはやっぱり人。いくつになっても自分らしく、心豊かに生き続けられるためのサービスを提供していきたいです」

おおにし ともこ　滋賀県大津市出身。1986年短期大学部社会福祉学科卒業（滋賀県立東大津高校出身）。理学療法士、介護福祉士。2006年に旅行介護をボランティアで始め、2009年のNPO法人化を経て、2013年に株式会社どこでも介護設立。2017年第一回大津女性ビジネスプランコンテスト アントレプレナー賞グランプリ受賞。

10 | News & Topics

最新情報

端艇部、第40回全日本軽量級選手権大会「男子舵手なしクォドルプル」で優勝

2018年5月に開催された第40回全日本軽量級選手権大会。「男子舵手なしクォドルプル」に出場した橋本昌樹さん（法学部3年）、川端章太さん（社会学部3年）、北村仁太さん（法学部4年）、野々下凌央さん（社会学部1年）が、同種目2年ぶりの優勝を果たした。予選、準決勝をトップタイムで通過し、決勝では、序盤トヨタ自動車に先行を許したが、中盤で並び、ラストスパートで1位となった。

女子柔道部　平成30年度全日本学生柔道優勝大会にて準優勝

2018年6月、日本武道館にて平成30年度全日本学生柔道優勝大会が開催され、女子柔道部が団体で準優勝を果たした。決勝戦の相手は、4年連続で優勝している山梨学院大学。チーム一丸で戦った女子柔道部。優勝には届かなかったものの、2017年の結果より、さらに上位の準優勝に見事輝いた。来年初優勝をつかむために奮闘する、今後の女子柔道部に期待したい。

バドミントン部女子
関西学生バドミントン春季リーグで15季連続優勝

2018年5月に開催された、平成30年度関西学生バドミントン春季リーグ戦第5戦において、バドミントン部女子が15季連続の優勝を果たした。
同リーグでは、初戦の武庫川女子大学戦の勝利をきっかけに、苦しい局面もありながら、最終戦の関西学院大学戦まで5戦全勝を成し遂げた。

日本拳法部 第22回西日本学生拳法選手権大会で男子団体2連覇、女子団体は創部初の3位入賞

2018年4月、大阪中央体育館で第22回西日本学生拳法選手権大会が開催され、日本拳法部男子団体が優勝、女子団体は創部初の3位に入賞した。男子1部は12チームが参加し、本学は昨年覇者の重圧がかかるなかで見事2連覇を達成。
また、主将の杉本力也さん（社会学部4年）が最優秀選手賞を受賞した。

大阪、徳島、岡山、奈良の4会場にて「吹奏楽フェスタ」を開催

「東日本大震災・熊本地震復興支援チャリティーコンサート」として、大阪（6月）、徳島（6月）、「平成30年7月豪雨復興支援チャリティーコンサート」として、岡山（9月）にて、「吹奏楽フェスタ」を開催した。各会場では、地元の中学校、高校の吹奏楽部が複数参加し、最後には、出演者による合同演奏や会場全員での合唱をおこなうなど、大いに盛り上がった。9月30日には奈良会場にて開催予定。

「漬物グランプリ2018決勝大会」で農学部食品栄養学科の学生が「学生特別賞」を受賞

2018年4月、東京ビッグサイトにて、「漬物グランプリ2018決勝大会」が開催された。勝ち進んだ「近江つけもの研究所」（農学部食品栄養学科学生有志）の学生二人のうち、2回生の能登帆奈美さんが「学生特別賞」を受賞した（作品名：かぶと柿の柚子ジャム漬け）。本賞は、今回新設された賞で、能登さんは初代受賞者。当日は、審査員実食による審査や、作品を紹介するプレゼンテーション審査がおこなわれた。

「The 9th Joint Workshop for Young Scholars in Applied Mathematics」にて、理工学研究科と理工学部の学生がExcellent Research Awardを受賞

2018年3月、台湾・国立成功大学で「The 9th Joint Workshop for Young Scholars in Applied Mathematics」が開催。そこで、山川翔大さん（理工学研究科修士課程1年生）と越野真実さん（理工学部4年生）が、Excellent Research Award を受賞した。応用数学分野の研究における、学生国際交流のますますの活性化が期待される。

理工学部 岸本直之教授が「Water and Environment Technology Conference 2018」で「WET Excellent Paper Award」を受賞

２０１８年７月に開催されたＷａｔｅｒ ａｎｄ Environment Technology Conference 2018（WET2018）。ここで理工学部環境ソリューション工学科 岸本直之 教授、理工学研究科 環境ソリューション工学専攻 吉田英人さん、前澤化成工業（株）村上祥隆さんが、「WET Excellent Paper Award（最優秀論文賞）」を受賞。前澤化成工業（株）との共同研究成果である。

理工学部の学生が、DEIM2018「第10回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム」で学生プレゼンテーション賞を受賞

理工学部情報メディア学科4年生の川俣光司さんが、2018年3月に開催された、DEIM2018「第10回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム」にて、学生プレゼンテーション賞を受賞した。本フォーラムは、大学教員や企業の研究者・学生などが参加対象のフォーラム。電子情報通信学会データ工学研究専門委員会、日本データベース学会、情報処理学会データベースシステム研究会などが主催している。

政策学部 中森孝文教授が「第17回 ほんづくり大賞」優秀賞を受賞

政策学部 中森孝文教授の著書「不合理を活かすマネジメント－人まねの呪縛から逃れるために－」が、「第17回ほんづくり大賞」で優秀賞を受賞した。
この賞は、政府刊行物関連の書籍販売をおこなっている全国官報販売協同組合主宰。

「平成30年度学まちコラボ事業」に五つの事業が認定

京都市と大学コンソーシアム京都が協働で実施する「平成30年度学まちコラボ事業」に、本学より5事業が認定された。政策学部から3事業（「ふかくさ町家シネマ～校区と記憶～」、「団地のつながりを取り戻す連携プロジェクト『桃陵HANDs』」、「淀本町商店街ふれあいライブラリープロジェクト」）。短期大学部から1事業（「伏見・深草・東高瀬川の環境保護と地蔵盆プロジェクト」本誌P14-17）。また他大学との混合で1事業（「京北さとまちフェスティバル」）。

湖南市と龍谷大学の産学官連携による特産品開発事業「エンサイの栽培プロジェクト」、「養蜂プロジェクト」を実施

湖南市と龍谷大学は、産学官連携による特産品の開発事業として、「エンサイの栽培プロジェクト」と「養蜂プロジェクト」を2017年度よりおこなっている。湖南市の新たな特産物を創出する取り組みで、2018年度はエンサイを学校や施設、市民に育ててもらい、試食会も開催。また養蜂プロジェクトでは、農福連携による蜂蜜を使ったレシピづくりや新たな商品開発を予定している。

生と死、命を考える教育プログラム「アイリンブループロジェクト」を実施

東日本大震災による津波に巻き込まれて亡くなった佐藤愛梨ちゃんの発見場所に咲いていたフランス菊。短期大学部社会福祉学科では、これを各地に広める「アイリンブループロジェクト」に賛同。2017年度から、生と死、命を考える教育プログラムを実施している。学生とともに花を育てることで、命を考え、伝え、防災について語り継ぐ活動で、2018年6月には、プロジェクト関係者による特別講義をおこなった。

西本願寺の境内にて、国際学部の学生が外国人参拝者の案内プログラムを開始

2018年4月から、西本願寺の境内において、国際学部の学生が外国人参拝者の案内プログラムを開始した。スタッフ専用のアウターを着用した学生が、外国人参拝者に英語で案内をおこなう。活動は毎週土・日曜、9時から16時。観光系業種・学問分野を志向する学生が多い国際学部において、異文化交流や観光を実践的に学ぶ場、そして、継続的な組織運営を学ぶ場としても、学生の活躍が期待される。

「平成30年7月豪雨」の被災地岡山県倉敷市にて、復興支援ボランティア活動を実施

ボランティア・NPO活動センターでは、「平成30年7月豪雨」災害の被災地岡山県倉敷市真備町で、8月9日〜10日に復興支援ボランティア活動として、被災家屋での泥かき、清掃活動などをおこなった。今回活動した地域ではほとんどの家屋が2階まで浸水しており、ひとたび堤防が崩れた際の被害の大きさを身をもって感じることとなった。また、政策学部・石原凌河ゼミも、広島県三原市でボランティア活動をおこなった。

食と農の楽しさを伝えるWEBマガジン「Mog-lab（もぐらぼ）」本格稼働

https://mog-lab.com/

龍谷大学初の、サテライトサイトとして、食と農の楽しさを伝えるWEBマガジン「Mog-lab（もぐらぼ）」を開設し、本格的な情報発信を開始した。カジュアルで気軽に読める記事を通して、食や農を身近に感じてもらうのが目的。歴史／文学／アート／経済／スポーツなど、様々な視点から食の魅力に迫る。

2018年度　You, Challenger Projectが始動

https://www.ryukoku.ac.jp/challenger/

龍谷大学での学びを背景に、未来に躍動する学生の様々な活動を取り上げるYou, Challenger Project。2015年度に始まり、4年目を迎えた。各学部から1団体が参加し、それぞれが設定するテーマに沿って活動を進める。日々の活動は、学生がホームページに記事を投稿。自身の活動で未来を切り拓いていく学生の姿を見ることができる。

京都府立南丹高等学校と龍谷大学政策学部が連携に関する覚書を締結

2018年6月20日、龍谷大学政策学部（只友景士学部長）と京都府立南丹高等学校（川勝啓史校長）が、連携に関する覚書を締結した。
今回の協定は、龍谷大学政策学部と京都府立南丹高等学校がCBL（Community-Based Learning）の実施について連携し、双方の教育活動の向上に寄与することを目的としている。

京都信用保証協会と龍谷大学が包括連携協定を締結

2018年3月5日、龍谷大学（入澤崇学長）と京都信用保証協会（麻生純理事長）が、包括連携協定を締結した。龍谷大学と京都信用保証協会が有する資源を活用し、相互に連携することで、京都府下の地域の創生・発展に寄与することを目的としている。12月には、京都信用保証協会提供講座として「大廃業時代～中小企業が生き残るには～」を開講（無料）。ご興味のある方は、REC京都（075-645-7892）まで。

京都府と龍谷大学・龍谷大学短期大学部が就職支援に関する協定を締結

2018年7月14日、京都府内の企業等への就職を希望する学生の支援、就職促進を目的に、京都府内31大学が同時に京都府と、就職支援に関する協定を締結した。
これは、龍谷大学と京都府が相互に連携・協力し、学生に対し府内の企業情報等を提供するなど、就職活動を支援することにより、府内企業への就職促進を図ることを目的とするものである。

草津市と龍谷大学が包括連携協定を締結

2018年2月23日、龍谷大学（入澤崇学長）と草津市（橋川渉市長）が、包括連携協定を締結した。
この協定は、龍谷大学と草津市が連携し、相互協力のもと、地域発展に寄与することを目的としている。
2003年に締結した地域連携協定に基づく連携や、大津湖南エリア地域公共交通活性化協議会における交通政策への協力。大津・草津地域活性化協議会への参画、学生ボランティア活動など、これまでの活動の継続・拡大に向けた取り組みを開始する。

副学長に 吉岡 祥充（よしおか よしみつ）教授が就任（任期：2018.4.1～2020.3.31）

奈良産業大学法学部、高知大学人文学部、香川大学法学部を経て、2010年に本学法学部教授に就任。2014～2015年度に法学部長。2018年度より教学・国際交流担当の副学長に就任。専門分野は民法、とくに森林法制・森林政策と関連する土地法および土地所有権論。これらについて、環境問題と地域づくりの観点から研究している。

龍谷大学付属平安中学校・高等学校長に関目 六左衛門氏が就任（任期：2018.4.1～2021.3.31）

本学OBで、学校改革に実績豊富な元西京高等学校長の関目六左衛門氏が、龍谷大学付属平安中学校・高等学校長に就任。西京高校校長として進めた改革や中高一貫教育は、単なる大学進学率や生徒の学習意欲の向上だけにとどまらない学校改革の先進モデルとして、全国から注目されている。
これまで本学と付属平安が一体として進めてきた改革をさらに加速し、強化・充実させることで、高大接続教育の強化や教育力の向上につなげる。

11 | Book Café

新刊紹介

＊値段はすべて税込価格で表示
＊Book Caféについては龍谷大学学長室（広報）まで

01 出版助成

『地域間ヤードスティック競争の経済学』
西垣 泰幸（経済学部教授）著者

本書は、地方財政理論を情報の経済学とゲーム理論を用いて再検討している。ヤードスティック競争とは、住民が現職首長や議員のパフォーマンスを、近隣のそれをものさし(ヤード尺)として選挙を行えば、地域間に政策競争が生じ、行財政の費用削減や満足度の改善につながるというもの。補助金や地方税、地域間格差の是正などについて検討している。
2017年12月刊／284頁／日本経済評論社／5616円

02 出版助成

『差別表現の法的規制ー排除社会へのプレリュードとしてのヘイト・スピーチー』
金 尚均（法学部教授）著者

表現の自由は民主主義の実現の端緒である。と同時に暴力を生む端緒でもある。特定の集団を社会から排除することを扇動するのがヘイト・スピーチである。これは、制度的な差別と暴力行為を誘発していることから、不快な言動にとどまらず、同じ人間であることを否定することで人間の尊厳を侵害し、ヘイトクライムを招来する危険な言動である。
2017年12月刊／259頁／法律文化社／5400円

03 出版助成

『フランス近代憲法理論の形成ーロッシからエスマンへー』
時本 義昭（社会学部教授）著者

本書は、これまでまとまった形で論じられることのなかった19世紀フランスにおける近代憲法理論の形成過程を、法学教育改革を含む高等教育改革との関係で検討することをとおして、エスマン以前の憲法理論の重要性と彼の憲法理論のイデオロギー性とを剔抉した。その際、同時代のドイツにおける法学理論を常に念頭に置いた。
2018年2月刊／274頁／成文堂／5832円

04 出版助成

龍谷大学国際社会文化研究所叢書　第23巻
『A Linguistic Study of *Kamigata Rakugo* Stories』
角岡 賢一（経営学部教授）著者

本書は、本学国際社会文化研究所の出版助成を受けて刊行。上方落語に特化した英語の研究書は初めてと思われる。小話を含めてサゲ（オチ）を地口とそれ以外に分類し、語り口に差があるか分析した。また、『くっしゃみ講釈』と『軒付け』の二話を音響分析している。
2018年3月刊／193頁／松柏社／3024円

01 共同研究活動

龍谷大学国際社会文化研究所叢書　第21巻
『変貌と伝統の現代インドーアンベードカルと再定義されるダルマ』
嵩 満也（国際学部教授）編者

ダイナミックに変貌する現代インド社会。その中で常に再定義されてきた「ダルマ」の思想。仏教の中心思想でもあるダルマが、不可触民出身でありながら現在のインド憲法を起草し、カースト制度の廃絶をめざしたアンベードカルの思想と行動とどう結びついているのか。本書はそのことを思想的・系譜的に明らかにしようとした共同研究の成果である。
2018年3月刊／282頁／法藏館／2700円

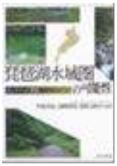
02
共同研究活動

龍谷大学国際社会文化研究所叢書　第22巻
『女たちの翼ーアジア初期近代における女性のリテラシーと境界侵犯的活動ー』
青木 恵理子（社会学部教授）編者

約100年前、近代的なリテラシーを獲得し、それによって新しい世界を生み出そうとした女性がアジア各地で出現する。彼女たちは、西洋ヘゲモニー下の植民地状況において、西洋近代女性像に憧れ反発しながら、発信する主体になろうとした。彼女たちの多様な軌跡を、社会福祉学、社会学、歴史学、文学、文化人類学から捉えた学際的研究書。
2018年3月刊／245頁／ナカニシヤ出版／3888円

03
共同研究活動

『琵琶湖水域圏の可能性
ー里山学からの展望ー』
牛尾 洋也（法学部教授）・吉岡 祥充（法学部教授）・清水 万由子（政策学部准教授）編著



「地方消滅」が叫ばれるなか、自然共生・循環型の持続可能な社会のあり方を追求する。琵琶湖を中心として、表流水、地下水域や氾濫域、人間活動による利水域や排水域、またそこに存在する生き物の生態系といった水域圏全体に焦点を当て、都市部と農村部が行政や地域住民などと協働し、新たなSatoyamaモデルを構築するための研究書である。
2018年3月刊／320頁／晃洋書房／3780円

04
共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書118巻
『裁判員時代の法リテラシー
ー法情報・法教育の理論と実践ー』
土山 希美枝（経済学部教授）編著、
石塚 伸一（法学部教授）共著

本書は、2003年に発足した龍谷大学法情報研究会を起点に、2014年-16年の社会科学研究所共同研究「熟慮型・表現型メソッドを活用した方教育に関する研究」での成果。専門家のためのものではなく、社会のなかでひろく共有されるべき「力」あるいは「素養」としての法教育を、研究員のゆたかな実践をともなう研究の集積である。
2018年2月刊／312頁／日本評論社／4860円

05
共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書120巻
『中国都市廃棄物と環境ガバナンス』
金 紅実（政策学部准教授）編著、
大原 盛樹（経済学部准教授）・北川 秀樹（政策学部教授）共著

大量生産、大量消費、大量廃棄のアメリカ式生産生活様式が、中国の都市部を中心に急速に広まることにつれて、生活廃棄物の適正回収・処理への社会的関心が高まり、行政の回収・処理サービスの規範化、制度化が急務となった。本書は都市生活廃棄物の法的概念や政策体系を整理し、青島市の事例や廃家電、廃自動車の実態を通して現状と課題を提示した。
2018年3月刊／184頁／晃洋書房／3780円

06
共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書　第121巻
『社会共生学研究ーいかに資本主義をマネジメント（制御）していくかー』
重本 直利（元経営学部教授）共編著、山西 万三（元経営学部教授）・林 尚毅（経営学部教授）・細川 孝（経営学部教授）共著

人間は長い年月を共同体全体の利益を守って生きてきた。社会共生学は「共生社会」を実現する方法に関する学問である。「共生社会」とは、中央集権国家ではないアソシエーションを基礎とした市民的マネジメントによる地域社会であり、「自己調整的市場に埋め込まれた社会」の超克でもある。
2018年3月刊／415頁／晃洋書房／7020円

07
共同研究活動

龍谷大学社会科学研究所叢書　第122巻
『エネルギー・ガバナンス
地域の政策・事業を支える社会的基盤』
的場 信敬（政策学部教授）著者

東日本大震災以降の「エネルギー源の転換」と「地域社会の持続性」という、大課題に対して、エネルギー政策や事業を、地域の持続性を実現する「ツール」として活用することで、地域社会の課題に包括的に取り組む方策を検討した書籍。そのような地域運営を「エネルギー・ガバナンス」と呼び、その成立に寄与する社会的基盤について議論している。
2018年2月刊／198頁／学芸出版社／3456円
書評「人間と環境」Vol44 No.2　2018年6月

01 みんなの本棚

『小さな幸せの見つけ方ー幸せはあらゆる瞬間にあなたのそばにあるー』
大來 尚順（2004年度文学部卒業／僧侶・翻訳家／山口県）著者

仏教用語を使わずに日常生活のふとした様々な場面から、「視点が変われば世界が変わる」ことを説いた新しい形の仏教本。

2018年4月刊／195頁／アルファポリス／1404円

02 みんなの本棚

『カンタン英語で浄土真宗入門』
大來 尚順（2004年度文学部卒業／僧侶・翻訳家／山口県）著者

英訳された仏教用語のほうが、その意味するところを理解しやすいと説いた、仏教入門書『英語でブッダ』に続く英語単語で考える浄土真宗入門本。

2018年7月刊／125頁／法藏館／1296円

03 みんなの本棚

『ドラッカーの時間管理術』
吉松 隆（1991年度文学部卒業／組織開発コンサルタント／東京都）著者

現代のビジネスパーソンにとって最大の資産は「時間」といえる。本書は「時間を記帳」して管理することを説く。時間の管理とは命の管理でもある。永劫回帰に役立つ。

2017年12月刊／160頁／アチーブメント出版／1296円

04 みんなの本棚

『近代スポーツの病理を超えてー体験の社会学・試論ー』
小丸 超（2011年度社会学研究科卒業／大学教員／福岡県）著者

近代スポーツの病理現象を「体験の捨象」という視点から一貫して分析。「型にはめる」コーチングに代わる「気づかせる」コーチングを提唱する。

2018年2月刊／120頁／創文企画／1620円

出版情報

01:『考えたくなる　人権教育キーコンセプト』
友永 雄吾（国際学部准教授）編者・共著
人権について学び、人権のための教育・啓発に関わる人が押さえておきたい、重要な概念を具体例に基づき解説したガイドブック。
2018年3月刊／145頁／世界人権問題研究センター／300円

02:『International Workshop: Rethinking Interaction between Indigenous Traditional Knowledge and Modern Knowledge』
友永 雄吾（国際学部准教授）編者
「先住民の伝統知」と「近代知」の相互作用をテーマとして、アジア・太平洋地域の事例から、考察と議論をした研究報告書。
2018年3月刊／98頁／アインズ／非売品

03:『桃山文化期漆工の研究』
北野 信彦（文学部教授）著者
御殿建造物・南蛮漆器・高台寺蒔絵・出土漆器・当世具足などの桃山文化を彩った漆工について、文化財科学的な視点から取りあげた、文化史的な研究書。
2018年2月刊／403頁／雄山閣／22680円

04:『現代社会と教育の構造変容』
髙田 満彦（社会学部教授）共著
本書は学校教育に視点を置きながらその現状と課題を明らかにし、社会構造の変容が学校教育に与え

る影響を明らかにしようとしたものである。
2018年4月刊／192頁／ナカニシヤ出版／2484円

05:『Basic Study 民事訴訟法』
越山 和弘（法学部教授）著者
要件事実論をふまえた事例と解説で、民事訴訟法の基本がよくわかる入門書。
2018年4月刊／308頁／法律文化社／3240円

06:『1冊でわかるキリスト教史』
久松 英二（国際学部教授）共著
キリスト教二千年の通史であるとともに、日本キリスト教史まで収める入門書。一般の世界史と重ね合わせ、わかりやすく解説する。
2018年3月刊／244頁／日本キリスト教団出版局／2376円

07:『Asymmetric Kernel Smoothing:Theory and Applications in Economics and Finance』
蛭川 雅之（経済学部教授）著者
ノンパラメトリック統計学において、近年研究が進んでいる非対称カーネル関数を利用した平滑化に関する初の解説書。
2018年7月刊／124頁／Springer／€49.99

08:『翻訳と語用論』
東森 勲（文学部教授）著者
関連性理論で、翻訳も推論を用いた言葉によるコミュニケーションの一つと考え、『サザエさん』、ジョーク、ことわざ、仏教用語などを扱ったもの。
2018年3月刊／151頁／開拓社／2400円

09:『<死者/生者>論―傾聴・鎮魂・翻訳―』
金澤 豊（文学部実習助手）共著
東日本大震災後も多発する自然災害。そこで死者と生者が取り結ぶ関係とは。沈黙の声を聴き、見えないものを語るために、13名が結集した論文集。
2018年3月刊／398頁／ぺりかん社／3456円
書評「中外日報」2018年4月13日・「京都新聞」2018年6月20日

10:『漢倭奴国王から日本国天皇へ―国号「日本」と称号「天皇」の誕生』
冨谷 至（文学部教授）著者
「日本」という国号と、「天皇」という称号が、いつどのような理由で誕生したのか。前1世紀から8世紀におよぶ日中の交流史からそれを考える。
2018年4月刊／224頁／臨川書店／3240円
書評「朝日新聞」2018年5月26日・「綴葉」2018年7月・「日本経済新聞」2018年7月14日

11:『宮内庁書陵部柳原本朔旦冬至部類 影印と翻刻』
木本 好信（文学部教授）・樋口 健太郎（文学部准教授）共著
古代から中世に至る、朔旦冬至の史料を集めた部類記を初めて翻刻し、解説を付した。未紹介の記録を多数含み、日本史・日本文学研究に有用である。
2018年6月刊／255頁／武蔵野書院／8964円

12:『Pyridine』
佐藤 茂（農学部教授）共著
同書の第3章に、'Diverse promotive action of pyridine carboxylic acids on flowering in ornamentals and seedling growth in vegetable crops'を分担執筆した。
2018年7月刊／IntechOpen／74頁／£140

13:『朝鮮通信使 易地聘礼交渉の舞台裏―対馬宗家文庫ハングル書簡から読み解く―』
許 秀美（文学部講師）共著
対馬藩朝鮮通詞・小田幾五郎宛ての新発見ハングル書簡を読み解き、19世紀の日朝間での最大の外交懸案であった易地聘礼交渉の舞台裏を明らかにした。
2018年7月刊／448頁／九州大学出版会／9936円

14:『ことばの水底へ「わたし」をめぐるオスティナート』
國重 裕（経営学部准教授）著者
恩師の肖像、芸術論をまとめた著者初のエッセイ集。オーストリア、フランスの文学や音楽を題材に、言語危機と自我の虚構性に迫る。
2018年6月刊／200頁／松籟社／1728円

15:『財務会計の理論と制度』
井手 健二（経営学部教授）共著
「基礎概念」「理論と実証」「財務会計の展開」の四つの視点から、現代会計の本質と内在する問題点を解明。
2018年2月刊／389頁／中央経済社／6048円

広報誌『龍谷』のデジタル版配信について

広報誌「龍谷」はデジタル版でも閲覧できます。冊子版の発送を不要とされる方は、各号に綴じ込まれているハガキ、または以下のデジタル版配信申込ページにてお申し出ください。手続き完了以降は、毎号の広報誌「龍谷」刊行ごとに、ご登録いただいたメールアドレスにデジタル版発行のご案内をいたします。

広報誌「龍谷」デジタル版配信申込ページ
https://www.ryukoku.ac.jp/prdigital/

下記URLおよびQRコードから過去の広報誌（デジタル版）がご覧いただけます

2016年No.82

2017年No.83

2017年No.84

2018年No.85

Degital Library
https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/

広報誌『龍谷』86号（デジタル版）プレゼント応募・読者アンケートフォーム

今後のよりよい広報誌づくりのため、Webアンケートにて皆様のご意見をお聞かせください。なお、アンケートにご回答頂いた方全員が、プレゼント抽選の対象となります。

https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/

広報誌『龍谷』からプレゼント

龍谷ミュージアムペア招待券 …… 10組20名様

龍谷大学オリジナル「あぶらとり紙」…… 5名様（二つセット）

株式会社大木工藝と龍谷大学理工学部の産学連携活動による、共同研究から生まれたあぶらとり紙です

ご希望の方は、読者アンケートフォームにご回答ください。
また、はがきでご応募の方は、ご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号（龍谷大学卒業生は卒業年度・学部なども）及び広報誌「龍谷」の感想・意見、あなたの近況などを書き添えてご応募ください。はがきでご応募の場合のあて先は右記「プレゼント」係まで。感想や近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。

締め切りは12月7日（金）必着。

応募多数の場合は抽選で。当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

読者のひろば

大学の取り組みがよくわかる。自分も仕事をしていて、いろいろな考えが参考になる。また、頑張ろうと思う。
在学生保護者　Sさん

子ども自身から学校のことを、あまり聞けないので、定期的に発行される広報誌は楽しみです。
在学生保護者　Oさん

写真の生き生きとした姿から様々な活躍をされていると想像することもでき、読んでいて面白かったです。
卒業生　Yさん

お便り待っています

「読者のひろば」へのお便りをお待ちしています。また、「龍谷人」などへの推薦や情報をお寄せください。いずれも以下のあて先まで。
※いただいた個人情報は広報誌「龍谷」の編集以外の目的には使用いたしません。

プレゼント・お便りのあて先

龍谷大学 学長室（広報）
〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
電話：075（645）7882
FAX：075（645）8692
E-mail：kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

【編集委員】
青戸 英夫、石埼 学、上手 礼子、小野 勝士、落合 雄彦、笠井 賢紀、梶脇 裕二、河角 隆弘、木村 友貴、佐々木 郁子、土山 希美枝、デブナール ミロシュ、田 園、德田 眞三、外村 佳伸、長瀬 拳志、野呂 靖、藤原 直仁、藤﨑 智史、水杉 唯可、水野 哲八、山口 大、若林 雅子（50音順）
【事 務 局】
増田 滋彦、田中 雅子、栃木 紅美

広報誌「龍谷」86号
2018年9月28日発行
編　集：龍谷大学編集委員会
制　作：龍谷大学学長室（広報）
発　行：龍谷大学
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
電話　075（642）1111（代表）
龍谷大学ホームページURL
http://www.ryukoku.ac.jp

公式 facebook「龍谷大学」
www.facebook.com/RyukokuUniversity/

公式 You Tube「龍谷大学」
www.youtube.com/user/RyukokuUniversity

公式 Instagram「龍谷大学」
www.instagram.com/ryukokuuniversity/

龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY